

No. 1102

— 石油コンビナート —

海を殺すな

国をあげてG N Pを追い求めてきた経済大国日本。巨大開発によって海岸線は姿をかえ、石油コンビナートが林立する。そこに生きる人間は、火災による危険におののき、不等沈下による油の流出におびえる。今や石油コンビナートがうみ出す危険と汚染は生命をおびやかす、日本列島をおおいつくそうとしている。

四方を海に囲まれ、山紫水明の地とうたわれた日本列島。瀬戸内海もその例外ではなかった。しかし、47年の赤潮被害にはじまり、P C B汚染、そして重油流出と、あいつぐ被害に漁民の怒りは爆発した。国、地方自治体、そして沿岸企業を相手に訴訟にふみきった。

公害の街四日市。コンビナートが生み出す大気汚染に長い間苦しみ続けてきた。海水の汚濁に漁業をすてることをよぎなくされた漁民がいる。それに追いうちをかけるように、石油タンクが炎上、夜空をこがすグレンの炎が四日市市民を震えあがらせた。四日市だけでこの十年間にコンビナートで発生した事故は49件に及ぶという。

年々巨大化するタンカー、その事故による被害のスケールも巨大化する一方だ。その度に魚を奪われ、漁場を失ってきた漁民は今疲れ果てている。

石油のもたらした物質文明を誰もが信じていた神話の時代は終わった。東京にはすでに空はない。そして今や日本列島全体が巨大な魔の手によってのみこまれようとしている。

2月21日「海を活かし・コンビナートを拒否する集会」が東京で開かれ、北は北海道から南は沖縄まで、「海を汚すものへの怒り」が結集された。

だまって死を待つより、闘う以外に生きる道はない」「海の汚染は日本人の恥だ」「ひとりの主婦として食べ物を汚す海の汚染は許せない」「海は誰のものでもない海自身のものだ」

鳴門赤潮訴訟原告団長の近藤三次氏は「私は金が欲しくて訴訟するわけではありません、海が欲しいんです。お願いです海を返して下さい」と訴えた。

海を返せせ、海を殺すな、海は万民のものではなかったか。